

《論 説》

戦前期岡山県の一地主経営における 地主・小作関係の展開 (I)

——岡山県邑久郡牛窓町服部和一郎家の場合——

神 立 春 樹

目 次

- 1 はじめに
- 2 土地所有状況の概要
- 3 小作人の存在形態と小作地の管理方式
 - (1) 小作人の存在形態
 - (2) 小作地の管理方式 (以上本号)
- 4 小作人の動向と地主家の対応
 - (1) 小作人の動向
 - (2) 地主家の対応

1 はじめに

本稿は、岡山県邑久郡牛窓町に居所をおいた戦前期の大地主服部和一郎家における地主・小作関係を検討することを内容としている。このように、一地主家における地主・小作関係というきわめて個別的な対象を検討することの理由、あるいは意図などについてまず述べておきたい。

服部和一郎家（通称西服部家）は大正元（1912）年に耕地180町歩余を所有し、土地持会社によるものをもふくめて最大時（大正11年）に約200町歩

に達した岡山県有数の大地主家であった。東京大学社会科学研究所の研究グループ（代表大石嘉一郎氏）は1978年以来、この西服部家の地主経営についての共同研究を行なっているが、筆者も地元在住協力者の一人としてこの共同研究に加わり、この西服部家における小作地・小作人の管理・支配方式、小作人の動向と地主家の対応等を担当部分の一つとしてきた。この共同研究は目下、鋭意そのとりまとめがすすめられているところであるが、わが国地主制史研究におけるこの西服部家研究の意義については、大石氏とともにこの共同研究のとりまとめを担ってきている西田美昭氏によって示されている。それは、この十数年間における地主制史研究の進展の著しさにもかかわらず、これまでの事例分析のほとんどが東日本地域に集中し、西日本地域の事例分析はきわめて限られたものしかない、という問題があるなかで、この西服部家史料は、これまで分析が手薄であった西日本地域の地主経営史料として重要である。とくに西服部家の土地集積の拠点の岡山県邑久郡が西日本を代表する有数の高位生産力地帯であり、また大正11（1922）年創立の日本農民組合の最初の拠点岡山県の中核の邑久・上道連合会の所在したことによっていっそうのこと、そうである、ということである。⁽¹⁾このような概括的な位置づけと見通しのもとにこの西服部家史料の分析が共同研究参加者によって行なわれているのである。上述の筆者の分担部分の検討もこのような位置づけと見通しのもとに行なっていることはいうまでもない。本稿は以上のごとき共同研究における筆者の分担部分の作業で得られたことを記し、研究推進の一役となることを期している。⁽²⁾

（1）『服部和一郎家所蔵文書目録―岡山県地主史料―』1977年 東京大学社会科学研究所、「解題」（西田美昭執筆）2ページ。

（2）前掲（1）9ページに日本地主制史の代表的著書をあげているが、それ以後、①坂井好郎『日本地主制史研究序説』1978年 お茶の水書房、②丹羽弘『地主制の形成と構造』1981年 お茶の水書房、③ナйкаイ塩業株式会社社史編纂委員会編『備前児島野崎家の研究―ナйкаイ塩業株式会社成立史―』1781年 竜王会館・同社、④太田健

2 土地所有状況の概要

この西服部地主家における小作人の存在状況をはじめとする筆者の担当分の検討は、なによりも小作地の存在状況や土地の集積過程そのものの検討を前提とする。この共同研究ではこの小作地の存在状況や土地の集積過程の検討は他の担当者によってすすめられているが、ここでは本稿での検討に必要なかぎりでの記述を行なうこととする。

服部家の地主経営帳簿などの所蔵文書による検討をまつまでもなく、公刊された印刷物にもこの西服部家の土地所有状況を示すものはいくつかある。まず、「岡山県貴族院多額納税議員互選人名簿」⁽³⁾である。この「互選人名簿」の第1回の明治23(1890)年、第2回の明治30年、第3回の明治37年の分によると、西服部家服部平五郎は、23年は納税総額で第5位、地租のみでは第6位、30年は23年と同様、そして37年にはそれぞれ第4位、第5位というように、県下有数の高額納税者、土地所有者である。任期7年の貴族院の多額納税議員の互選期はその後は明治44(1911)年、大正7(1918)年、大正14年であるが、これらの年の分および補欠選挙の行なわれた明治39年、大正4年、大正12年の分にはこの西服部家は記載されていない。これは平五郎について家督を相続した和一郎氏(現当主)の年齢が貴族院多額納税議員互選人のそれに達していないことによるのである(和一郎氏は明治27年2月24日生れ、

一『日本地主制成立過程の研究—近畿型地主経営の研究—』1981年 福武書店、が刊行されている。いずれもがいわゆる「近畿型」地主の研究成果であるが、とくに③、④は岡山県南部に関するものであり、本稿はそこであきらかにされた備前西部・備中の地主家との比較を念頭においている。

(3)「岡山県貴族院多額納税議員互選人名簿」は、①『倉敷紡績の資本蓄積と大原家の土地所有 第二部附属資料』1970年 東京大学社会科学研究所 58～66ページに掲載されている。しかしそれは明治30年分を欠くこと、23年分に不整合のあることにより、本稿では明治23、30年については②難波保夫「〈資料〉岡山県貴族院多額納税議員互選人名簿」、『研究会誌』(岡山大学日本経済史研究会)2号 1979年 所収、によった。

家督相続は38年1月で、11歳に達する頃であった)。このように、この「互選人名簿」によって西服部家が明治23年の時期にすでに岡山県下有数の大地主であることを知ることができる。つぎに、大正12年の「耕地50町歩以上所有地主名簿」⁽⁴⁾である。この「50町歩以上地主名簿」によると、岡山県には55人が記載されている。そのうちには2人で共同所有というのがあり、しかもその耕地は北海道にあるのでこれを除外すると53ということになる。またこのうちには所有者が財団法人、合資会社というものが各1あり、個人所有にかかわるのは51である。野崎武吉郎(559.9町歩)、大原孫三郎(322.4町、ほかに財団法人大原奨農会202.7町)、大橋平右衛門(153.9町)、土居通博(135.3町)、小野はし(同上)をはじめとするこの「地主名簿」の岡山県分には、しかしながら西服部家は記載されていない。ところで、この「地主名簿」の他府県分にその所有耕地の主なる所在郡名を岡山県のそれとするものが4人いる。東京府1、大阪府2(うち1は児島郡3ヵ村を主に1076.2町を所有する合名会社藤田組)、兵庫県1で、西服部家はこの兵庫県を住所とするものとして記載されている。西服部家はこのとき、県税戸数割賦課をめぐる牛窓町との間のトラブルによって兵庫県武庫郡精通村に住所を移していたのでこのようになっている。所有耕地段別は82.2町で、岡山県邑久郡12ヵ町村を主なる耕地所在地としている。その所有規模は岡山県下地主の第17位という、かなり下位のところに位置していることになる。しかし、西服部家所蔵文書によれば、この頃には二つの土地持会社があるが、西服部家分に土地持会社をあわせ、さらに20町歩をややうわまわる塩田をもふくめると同年の耕地所有は190町歩程であり(第1図参照)、岡山県有数の大地主であることにかわりはない。

以上において、西服部家が戦前期岡山県の有数の地主であったこと、明治

(4)「大正十三年六月調査 五十町以上ノ大地主 農務局」『日本農業発達史 第七巻』1955年 中央公論社 所収。

23年段階にはすでにそうなっていることをみてきた。このような大地主における地主・小作関係の展開の検討が筆者の課題であるが、以下それに必要な限りでの土地所有状況にみられる特徴を吟味していこう。

先に西服部家の地主としての地位をそれによって確認した「互選人名簿」には、この西服部家の地主としての特徴を読みとることができる。第1表によって明治23年についてみよう。これら上位15人の所有土地の郡・町村数をみると、1人平均4.0郡、17.0町村となる。この15人の納入地租額1人あたりの平均は1,880円12銭となる。いま地租1,000円あたりの郡数、町村数は、2.13郡、9.04町村となる。この地租1,000円あたり郡数、町村数において、この西服部家は郡数3.98、町村数18.59というきわだった大きさとなっている。前者では都志一郎の6.65につぐものではあるが、後者は西服部家につぐ服部平九郎の15.67を大きくうわまわる最大となっている。この数が大きいということは、単位面積の土地が広範囲にひろがっているということで、少数の地域でのまとまった所有ではなく、小量ずつをひろい地域で所有していることを示す。この点において巨大地主ともいべき野崎家、大原家の場合とはともに最も小さく、西服部家とはことのほか著しい対照を示す。しかしこの西服部家と同様の傾向にあるのは服部平九郎、伊原木藻平、それに都志一郎などにすぎず、他は野崎、大原両家と同様であって、特異なのは野崎、大原両家ではなく、この西服部家である。この西服部家の特徴は1町村あたり地租額にも示される。この15人全体の1町村あたりの平均は110円59銭5厘であるが、この西服部家のそれは53円82銭6厘にすぎず15人中の最小である。この点野崎家は222円9銭1厘と大きく対照的であるが、この西服部家と同様の小ささを示すのは伊原木、服部平九郎、都志などにとどまる。この1町村あたり地租の小ささは、これまた西服部家の所有土地が小規模ずつひろい地域に分散していることを示しているといえよう。

このように西服部家の所有耕地は、いわば相対的に、広範囲の地域に分散しているという特徴があるが、このような特徴はこの西服部家の土地集積過

第1表 貴族院多額納税者議員互選人の状況

(明治23年)

氏 名	都市・町村	族籍・職業	納 税 額					郡町村数		地租1,000円あたり		1町村あたり
			総 額	地 租	所 得 税			郡数	町村数	郡 数	町 村 数	地 租 額
					合 計	土 地	そ の 他					
			円	円	円	円	円					円
野 崎 武吉郎	児 島・味 野	士族・農	5,865.118	5,330.193	534.925	447.150	87.775 { 27.125 ① 42.200 ② 18.450 ③ }	6	24	1.13	4.50	222.091
大 原 孝四郎	窪 屋・倉 敷	平民・商	5,795.567	5,585.067	210.500	164.300	46.200 { 46.200 ① }	6	37	1.07	6.62	150.948
大橋 平右衛門	窪 屋・倉 敷	平民・農	2,063.021	2,016.521	46.500	46.500	— —	4	13	1.98	6.45	155.117
星 島 謹一郎	児 島・藤 戸	平民・農	1,661.385	1,615.455	45.930	45.930	— —	3	11	1.86	6.81	146.860
服 部 平五郎	邑 久・牛 窓	平民・商	1,577.360	1,507.130	70.230	32.280	37.950 { 30.060 ① 5.490 ④ 2.400 ⑤ }	6	28	3.98	18.58	53.826
土 居 通 信	西北条・田 邑	士族・農	1,576.478	1,541.243	35.235	32.235	— —	3	9	1.95	5.84	171.249
伊原本 藻 平	上 道・西大寺	平民・農	1,410.658	1,368.103	42.555	30.555	12.000 { 12.000 ⑥ }	3	20	2.19	14.62	65.889
豊 福 俊 雄	吉 野・栗 広	平民・農	1,355.234	1,317.779	37.455	29.730	7.725 { 7.725 ⑦ }	5	13	3.79	9.86	101.368
日 笠 啓 夫	児 島・藤 戸	平民・農	1,260.039	1,228.479	31.560	31.560	— —	3	11	2.44	8.95	111.680
金 田 伝一郎	真 島・落 合	士族・無職	1,230.802	1,200.307	30.495	30.495	— —	2	8	1.67	6.67	150.038
佐 藤 栄 八	都 宇・江 島	平民・商	1,218.016	1,163.536	54.480	26.730	27.750 { 11.250 ⑧ 16.500 ⑨ }	4	7	3.44	6.02	166.219
服 部 平九郎	邑 久・牛 窓	平民・商	1,141.824	1,085.004	56.820	25.470	31.350 { 18.750 ⑩ 12.600 ⑪ }	3	17	2.76	15.67	63.824
高 木 要 造	賀 陽・庭 瀬	平民・農	1,126.254	1,105.914	20.340	20.340	— —	3	8	2.71	7.23	138.126
部 志 一 郎	窪 屋・中 洲	平民・農	1,103.889	1,052.244	51.645	36.095	15.550 { 14.635 ① 0.915 ⑩ }	7	12	6.65	11.40	87.687
梶 谷 伊平治	窪 屋・中 洲	平民・農	1,084.823	1,084.823	—	—	— —	2	8	1.84	7.37	135.603
合 計			29,470.468	28,201.798	1,265.670	999.370	266.300	60	255	2.13	9.04	110.595
1人あたり平均			1,964.698	1,880.120	84.378	66.624	17.753	4	17	2.13	9.04	110.595

註 1) 難波保夫「岡山県貴族院多額納税者議員互選人名簿」,『研究会誌』(岡山大学日本経済史研究会)第2号 1978年 所収,より作成。

原史料は「明治二十三年貴族院多額納税者議員互選人名簿」服部家史料 No. 1-ℓ-2.

2) その他の { } 内はそのうちわけて, ①金穀貸付, ②塩問屋, ③製塩, ④酒造, ⑤味噌商, ⑥呉服商, ⑦生糸製造, ⑧小倉商,

⑨替為店, ⑩材木商, ⑪肥料商である。

程の特質と関連するものと思われる。この西服部家の所有状況が帳簿上に整備されたものとして記されるのは明治17年度分からであって、それ以前は明確ではない。この共同研究の一員の難波保夫氏作成の第1図はこの明治17年以降の土地所有の推移を示す。ここから、明治17年にはいまだ50町歩にもみたなかったものが、20年代初めにかけての時期に急テンポに土地集積をおこなっていること、この過程で邑久郡外に急速に進出していること、この拡大はその後もつづいていること、個人での所有は大正元年をピークとしていること、この年以後は縮小傾向をたどるが、土地持会社によることにより全体としてはストレートには縮小していないこと、などが注目されよう。これらのことを、たとえば同じく岡山県南部の野崎家が明治10年には200町地主⁽⁵⁾であり、大原家が同年に100町歩地主であったこと⁽⁶⁾、岡山県南部の地主の土地所有は明治20年代・30年代の交ごろをピークとするものが多かったことなど⁽⁷⁾と比較してみると、以上のことを西服部家の特徴として指摘することができる。この明治17年以前についてであるが、それは断片的にしか判明しない。森元辰昭氏の検討によると、文化10(1813)年の西服部家の段別・石高は、田3反4畝21歩、その高5石2斗8升1合7勺、畑屋敷2反8畝14歩2厘5毛、その高2石6斗3升5合9勺、合計5反3畝5歩2厘5毛、7石9斗1升7合9勺である⁽⁸⁾。この時期にはこのような零細所有者にすぎなかった。その約50年ほどあとの文久元(1861)年には田畑合計1町7反7畝16歩、高25石9斗4升5合8勺となっている。明治期に入ってからであるが、明治8(1877)年から16年についての小作米取立高が同じく森元氏によってあきらかにされている。それによると、明治8年100.837石、9年55.217石、10年

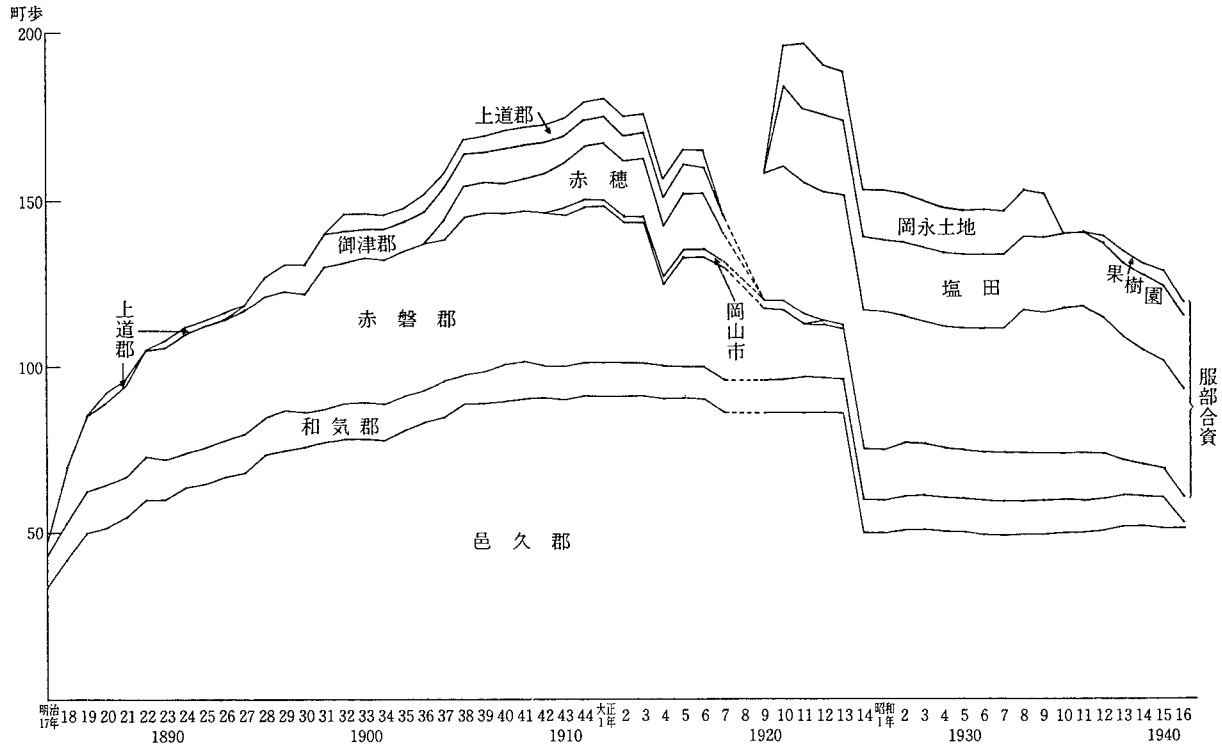
(5) 前掲(2)―③と同一書 418ページ。

(6) (3)―①と同一書 54～55ページ。

(7) 『溝手家文書目録』1966年 岡山大学附属図書館の「解題」(森元辰昭執筆)、前掲(3)―①と同一書 57ページ、(2)―④と同一書 344ページ参照。

(8) 原史料は、「文化十年牛窓田畑屋舗畝高帳」(史料番号、以下同じ、No.1-k-5)、「文久元年牛窓村田畑畝高名寄帳」(No.1-k-19)。

第1図 西服部家土地所有の推移 (難波保夫原図)



註1) 「地所純益勘定帳」(史料番号, 以下同じ, No.1-c-9), 「地所所得勘定帳」(No.1-c-51)。

137.797石, 11年251.700石, 12年231.956石, 13年199.802石, 14年222.547石, 15年294.298石, 16年374.328石である。⁽⁹⁾明治初年代末で十数～20町歩台, 10年代前半に30町歩台, 10年代半ばに40町歩台に達しているものと思われる。その所在地も8年は牛窓, 鶴山, 豊の3ヵ町村であったが, 10年には行幸村が, 11年には国府, 本庄, 今城, 邑久の4ヵ村が, 13年には和気郡日笠村が, 15年には福田村が, そして16年には豊原村が加わるというように拡張しているのである。

以上のごとくにこの西服部家における土地集積は明治期に入ってから, しかも10年代になってから急速に進展するのであるが, その諸条件を検討したい。前引用の「西服部家目録」の「解説」には西服部家の由来について, 西服部家は江戸時代初期の延宝元(1673)年から牛窓を居所としていること, 当初は鍛冶を生業としていたが二代の鍛冶屋五郎作(元文5没)のときに木材業をはじめ, さらに6代梶屋平五郎(寛政11没)のときに酒造業を創業したこと, このように服部家は江戸時代後期には木材商・酒造業をいとなむ商人としての性格をもっていたこと, 文政元(1818)年7代の梶屋平兵衛(天保13没)のときに木材業を分離して新家を創立し, 平兵衛がその初代となったこと, 新家(東服部家)を分離した後の服部家(西服部家)は酒造・醬油造・酢造を中心としつつ質屋営業・小作地経営・山林経営・貸金業等に次第に手をひろげていったことを記している。⁽¹⁰⁾ところで服部家の居所であった牛窓であるが, ここは古来より瀬戸内海上交通の要地であった。江戸時代は瀬戸内海を往来する西国の諸大名などの寄泊地, 朝鮮使節の接待宿泊所として海港が発達し, これにともない商業がさかんとなり, 牛窓は繁栄した。またここには藩札を取り扱う札場が設けられていた。このようにして牛窓には有力な商人や両替商が存在した。記録にあらわれた両替商の名前, 屋号には梶

(9) 原史料は, 「地所純益勘定所」(No.1-c-9)。

(10) (1) と同一書 2～3ページ。

屋・西服部家、若葉屋・東服部家はでてこない。⁽¹¹⁾この両服部家は両替商ではないのでそこに名をつらねることはなくて当然といえようが、後年の、たとえば明治31年の「牛窓商工人名」⁽¹²⁾に記載されている有力商工業者（19名）のうちで、江戸時代の記録にあらわれているものにつながるのは松屋（岡義太郎）と花屋（竹内治助）のみである。多くあった有力商人の名前、屋号はそのほとんどが消え、また明治31年には営業税でみて岡山県最大の商業者である若葉屋服部平兵衛、同じく有力商工業者である梶屋服部平五郎の有力商人であったことを江戸時代の記録にみることはできない。以上のことから、江戸時代末期における有力商人層の没落とそれにかわる新興商人層の台頭という大きな社会変動を想定することができよう。両服部家はまさしくそのようにして登場してきたものと思われる。

ところで、「西服部家史料」はそれが膨大であるにもかかわらず、明治10年代、あるいはそれ以前のもの、そのような時期について後年に記したものは少ないが、そのようななかで「石井卯次郎謹白」ともいうべき明治27年4月の文書⁽¹³⁾がこの時期のことを記したものとなっている。ここで石井卯次郎は、まず「家憲ノ肇定ニ際会シ其広範ニ参与スル事ヲ得ルハ寔ニ恐懼ノ至リニ堪ヘズ」と謝意を述べた後、「抑閣下（平五郎のこと・引用者）ノ先君ニ代リテ家政ヲ承継セラレタルハ実ニ文久二年也 当時尊家ハ酒造販売ヲ業トシ傍ラ田畑山林ノ所得アリト雖モ収益微小也 而シテ尊君夙ニ業務ニ精励シ一身以テ家事ニ委ネ嘗テ片時モ耳目ノ歓楽ニ耽ラス 且常ニ節儉ヲ尚ヒ貯蓄ノ良能ニ富ム 其勤勉熱心ナル千万ノ星霜恰モ一日ノ如シ ……（中略）……克ク家政ヲ整理シテ漸々財源ノ豊富ヲナス 明治八年始メテ地所抵当貸金収利

(11) 以上については、刈屋栄昌『牛窓風土記』1973年 牛窓郷土研究会 63～65, 94～95を参照。

(12) 『日本全国商工人名録 第二版』1898年 所収。なお、拙稿「明治中期の岡山県における商品流通をめぐって」、『岡山大学経済学会雑誌』第15巻第2号 1983年 所収、はこの資料をも駆使して岡山県の主要商業地についての検討を行なったもので、牛窓についても論及してある。

(13) 「報告書」(No.1-a-91)のうちの一つ。

ノ業ヲ開キ時機宜シキヲ得テ本業大ニ振起シ加フルニ地所買収ニ注目シ明治九年始メテ和気郡新庄村ニ田地若干歩ヲ買得シ爾来貸金ト共ニ歩ヲ進ム 明治十五年ニ至リ貸付ノ業倍々盛ニシテ貸付ノ地方近傍数郡ニ互ルノミナラズ踰レテ美作ニ及ブ 此時ニ当リ世況俄ニ一変シ連年恐慌明治十八年ニ到最モ逼迫殆ド融通ノ道ヲ塞ク 然リト雖モ尊君能忍耐緩急ノ策ヲ施シ明治二十年ニ至リテ大約難件ノ局ヲ結ヒ是時ニ於テ地所ノ買収大ニ進ム 爾来貸金地所及酒業ノ業益々進ミ以テ今日ノ盛大ニ至ル ……」と記している。

ここから、文久2（1862）年に平五郎が家督をついだときは酒造販売を家業としていたこと、土地所有は僅かであったこと、明治8年にはじめて地所抵当貸金業をはじめたこと、同9年に邑久郡外に土地をはじめて取得したこと、同15年には貸金業はいっそう盛大となり、貸付の対象地域が非常に拡張していること、16年から始まり18年を最盛期とした不況期をのりきったが、この間に土地の集積が顕著であったこと、それ以来貸金業、土地営業、酒造業がいっそう発展していること、があきらかとなる。これまでのこの西服部家の幕末・明治初期の利益構成の検討によって、慶応3（1867）年には、酒造利益が111貫、地所利益11貫、質利子10貫、酢造利益4貫、貸金利益3貫となっていて、酒造利益が圧倒的であったが、明治15（1884）年には貸金利子5,542円、地所益1,113円、酒造利益893円、山林利益412円、醬油造利益287円、酢造利益258円となり（質屋営業は廃止）、貸金利子が断然多くなっている、西服部家は酒造業で得た利益を貸金にまわし、さらにその過程で土地を取得しつつ、次第にその規模を拡大していった、と10年代に急速化する土地集積の資金源泉があきらかにされ、さらに西服部家の収入構成においても、明治20年までは貸金金利が圧倒的で、22年には土地収入がそれを一旦はうわまわるものの30年代前半にはまた逆転していて、土地収入が第1位となるのは30年代末にいたってであることが示めされているのである。⁽¹⁴⁾ 先の第1表に

(14) (1) と同一書 2 ページ。

においても、いずれも大地主である多額納税者のなかでこの西服部家は納税額中の所得税のウェイトが相対的にたかく、所得税のなかでは金穀貸付が大きい⁽¹⁵⁾が、これはこの西服部家が貸金業を媒介として土地集積を行ってきた地主の最たるものであることを示すものといえよう。この点、野崎家が塩田経営の収益をもって新田開発に加わり、一挙に大地主となる基礎を得たこと、また野崎家の10年代後半の土地集積にはまさしくこの時期の没落中小地主からのものが多くみられたごとくであることとは大きな相違である。⁽¹⁶⁾明治10年代の岡山県における土地移動についての検討によれば、児島郡から後の都窪郡にかけての地域は土地移動の激しさにもかかわらず小作地率には上昇がみられない。すでに起点である16年にはきわめて高いのであって、小作地化がいちじるしく進んでいた。小作地率の上昇をともしない土地移動とは、推測するに地主の土地喪失が進行したということであろう。これに対して邑久郡などの備前東部の地域は当初は小作地率は低く、10年代の土地移動によってそれはたかまるのであって、農民所有地が一挙に喪失したものと推定される。⁽¹⁶⁾両地主家の立脚地域の差異をみることができよう。

3 小作人の存在形態と小作地の管理方式

(1) 小作人の存在形態

それでは、ここで西服部家の耕地を耕作する小作人の存在形態を検討しよう。

服部家には明治40(1907)年に「小作人名寄帳」があるが、西服部家の土地が最も多くある邑久郡の分を欠いているので、これによって検討することは出来ない。同家に残されている多くの年度の「小作米取立帳」のうちの明

(15) 前掲(2)―③と同一書の第1章、参照。中小地主の土地喪失についてはその345～346ページ掲載の野崎家「売用日記」明治16年10月13日の記事。

(16) 拙稿「明治10年代の岡山県における土地移動の地域状況」、『岡山大学経済学会雑誌』第13巻第4号 1982年 所収、を参照されたい。

治35年のものには小作地面積の記載もあるので、これによって検討する。第2表によれば、この年の小作人511人の1人あたり小作地は、2.1筆、2反1畝2歩、小作米2石7斗4升1合・6俵3斗4升1合である。この大きさは、たとえば同じ岡山県の大地主野崎家の大正8年の小作人(1,995人)の平均の⁽¹⁷⁾3.4反とくらべるとかなり小さいが、これは前節でみたこの西服部家の土地集積過程の特質にもとづくものである。このような状況にあるが、しかしそれは地域によってかなりの差異がある。小作地面積、小作料は郡別では邑久、御津が平均をうわまわり、赤磐がそれをしたまわっている。邑久郡でも豊村、行幸村、今城村、国府村は小さく、邑久郡が大きいのは邑久村、福田村の大きいことによる。とくに邑久村の1人あたり平均3反余、9俵余は108人という多数の小作人のそれであり、邑久郡の大きさはひとえにこの邑久村のそれによっているのである。平均の小さい赤磐郡でも可真村、佐伯村の小作地面積は大きく、赤磐郡の小ささは豊田、石生両村のそれによるのである。とくに小作地面積が1反2畝16歩、小作料1石9斗4升5合と小さい石生村は小作人110人であって、この石生村が赤磐郡の小ささをもたらしめているのである。第3表はこの西服部家の土地所有が最大であった大正元(1912)年の状況を示す。この年の887人の小作人の1人あたり小作料は6俵1斗7升6合で明治35年よりやや小さくなっているが、大差はない。この第2表には上道郡、兵庫県赤穂が加わり、また町村数も増加していて、町村別の小作人1人あたり小作料の大きさにも一定の変化もあるが、しかし邑久村の大きいこと、石生村の小さいことにかわりはない。そして小作人52人の平均が9俵余の邑久村尾張、小作人43人のそれがわずか3斗2升余の石生村田原上の状況が目ざれよう。この第2表に小作人98人、105人としてでている周匝村、赤

(17) 前掲(2)―③と同一書 441ページ。なお、大正13年の岡山県における大地主のうち80町歩以上の21地主家の小作人1戸あたりの小作地段別を前掲(4)と同一書によって算出してみると、西服部家は1反5畝20歩ほどになり最小となるが、これは1反8畝24歩ほどの東服部家とともに他の地主と比較してきわだった小ささである。

第2表 西服部家小作人の状況

(明治35年)

	小 作 人 の 状 況						同小作小1人あたり			
	小作人数	小作地面積	筆 数	小 作 米 (3.5斗俵)	同 石 高	4斗俵換算	小作地面積	筆 数	小 作 米 石 高	4斗俵換算
国 府 村	33	647.3	49	228.3.1.8	80.118	200.1.1.8	19.18	1.48	2,428	6.0.2.8
行 幸 村	21	393.17	34	166.2.7.8	58.378	145.3.7.8	18.22	1.61	2,780	6.3.8.0
邑 久 村	108	3,268.20	272	1,138.1.8.1	398.481	996.0.8.1	30.8	2.51	3,690	9.0.9.0
本 庄 村	25	501.3	33	177.2.7.0	62.220	155.2.2.0	20.1	1.32	2,489	6.0.8.9
幸 島 村	9	272.13	12	100.2.1.9	35.219	88.0.1.9	30.8	1.33	3,913	9.3.1.3
福 田 村	9	205.14	12	78.0.0.0	27.300	68.1.0.0	22.25	1.33	3,033	7.2.3.3
今 城 村	9	170.26	14	62.0.1.6	21.716	54.1.1.6	19.0	1.55	2,413	6.0.1.3
豊 村	20	326.15	33	123.0.3.4	43.084	107.2.8.4	17.0	1.65	2,154	5.1.5.4
豊 原 村	58	1,239.26	134	494.0.6.2	172.962	432.1.6.2	21.11	2.31	2,982	7.1.8.2
邑久郡 計	292	7,025.14	593	2,569.3.2.8	899.478	2,248.2.7.8	24.1	2.03	3,080	7.2.0.8
豊 田 村	6	82.13	9	33.0.6.5	11.615	29.0.1.5	13.22	1.50	1,936	4.3.3.6
石 生 村	110	1,378.4	201	611.1.4.9.2	213.999.2	534.3.3.9.2	12.16	1.82	1,945	4.3.4.5
可 真 村	13	338.7	47	101.0.0.0	35.350	88.1.5.0	26.1	3.61	2,719	6.3.1.9
佐伯村 ^{勢井}	17	425.17	57	121.3.0.9	42.659	106.2.5.9	25.1	3.35	2,509	6.1.0.9
赤磐郡 計	146	2,224.11	314	867.1.7.3.2	303.623.2	759.0.2.3.2	15.7	2.15	2,080	5.0.8.0
鶴 山 村	42	858.16	87	274.1.0.5.3	96.005.3	240.0.1.5.3	20.11	2.07	2,286	5.2.8.6
和気郡 計	42	858.16	87	274.1.0.5.3	96.005.3	240.0.1.5.3	20.11	2.07	2,286	5.2.8.6
御津郡 計	32	677.10	57	298.1.2.0	104.420	261.0.2.0	21.5	1.78	3,263	8.0.6.3
合 計	511	10,785.11	1,051	4,010.0.2.6.5	1,403.526.5	350.8.3.6.5	21.2	2.05	2,741	6.3.4.1
再掲 ^{尾張(邑久村)}	54	1,497.0	106	576.2.6.6	201.866	504.2.6.6	35.18	3.10	3,607	9.0.0.7
再掲 ^{巴原(石生村)}	93	1,122.5	167	499.0.1.9.2	174.669.2	436.2.6.9.2	12.16	1.82	1,945	4.3.4.5

註 1) 『明治35年小作米取立帳』(No. 1-e-275) より作成。

第3表 西服部家町村別小作人数, 小作料

(大正元年)

	小作人 人 数	筆 数	小 作 料		平 均			小作人 人 数	筆 数	小 作 料	平 均	
			俵斗升合	俵斗升合	筆 数	小作料						
邑 久 郡	354	734	2,562.2.7.9	2.07	7.0.9.6	赤 磐 郡	305	647	1,705.0.9.5	2.12	5.2.3.6	
牛窓町	35	57	160.3.3.1	1.63	4.2.3.8	豊田村	23	36	170.0.7.5	1.57	7.1.6.0	
岡府村	34	54	233.3.3.6	1.59	6.3.5.1	西山村	38	74	168.0.7.0	1.95	4.1.7.0	
福 里	11	14	48.2.0.6	1.27	4.1.6.4	矢田村	4	5	8.0.1.6	1.25	2.0.0.4	
土 師	23	40	185.1.3.0	1.74	8.0.2.3	佐伯村	20	59	105.1.8.4	2.95	5.1.0.9	
行幸村	50	123	375.3.6.2	2.46	7.2.0.7	可真村	12	47	89.1.7.0	3.92	7.1.8.1	
太伯村	6	14	36.2.7.1	2.33	6.0.4.5	石生村	110	208	574.0.4.1	1.89	5.2.6.9	
幸島村	10	15	99.2.8.0	1.50	9.3.8.8	原 本	23	38	140.2.0.5	1.65	6.0.4.4	
福田村	9	12	77.0.0.0	1.33	8.2.2.2	田原上	43	63	154.1.5.6	1.47	3.2.3.6	
今城村	8	15	56.1.3.5	1.88	7.0.1.7	田原下	44	107	278.0.8.0	2.43	6.1.2.9	
豊 村	18	32	107.0.9.4	1.78	5.3.8.3	周厩村	98	218	589.3.3.9	2.22	6.0.0.8	
豊原村	51	106	329.1.1.9	2.08	6.1.8.3	和 気 郡	24	42	112.5.4.6	1.75	4.6.8.9	
大 窪	10	22	70.2.3.3	2.20	7.0.2.3	鶴山村 ^{新田}	15	32	76.1.6.7	2.13	5.0.3.8	
潤 徳	18	45	168.2.2.9	2.50	9.1.4.6	伊部町	9	10	36.3.7.9	1.11	4.0.4.2	
大 橋	14	26	104.1.0.0	1.86	7.1.7.9	岡 山 市	4	6	36.3.7.4	1.50	9.0.9.4	
円 張	9	11	56.1.9.0	1.22	6.1.1.0	御 津 郡	37	70	290.1.3.5	1.89	7.8.7.9	
本庄村	26	41	154.0.7.0	1.58	5.3.7.2	鹿田郷浜村	9	10	35.0.8.4	1.11	3.3.6.5	
本 庄	9	11	46.3.6.0	1.22	5.0.8.4	大 野 村	9	23	114.1.4.3	2.56	12.2.8.3	
下山田	10	21	120.0.5.0	2.10	12.0.0.5	芳 田 村	19	37	140.3.0.8	1.95	7.1.6.4	
上山田	7	9	34.0.2.0	1.29	4.3.4.6	上 道 郡	11		134.2.4.3		12.0.9.4	
邑久村	107	265	931.2.8.1	2.48	8.6.9.2	沖 田 村	11		134.2.4.3		12.0.9.4	
山 手	6	7	42.1.0.0	1.17	7.0.1.7	服部合資	47	83	279.3.9.4	1.77	5.3.8.3	
山田庄	21	74	197.3.8.9	3.52	9.1.7.1	兵庫県赤穂	105	149	698.0.3.8	1.42	6.2.5.9	
尾 張	52	109	475.3.8.4	2.10	9.0.6.1	合 計	887		5,713.1.0.4		6.1.7.6	
豊 安	28	75	215.2.0.8	2.68	7.2.7.9	沖田を除く	876	1,731	5,713.1.0.4	1.97	6.1.7.8	

註1) 「大正元年と小作米書出帳」(No. 1-e-285)より作成。

穂はほぼ平均的な大きさである。

以上のごとき1人あたり平均となる小作人の階層別状況についてみよう。第4表は明治35(1902)年の小作人小作地階層別状況を示すものである。最多は1反以上層で164人で, 31.9%にあたる。ついで5畝以上層が93人, 18.1%, 2反以上層が82人, 16.0%であって, この5畝以上3反未満が全体の66.0%を占める。しかし, 最大1町8反層1人をふくめた1町以上層3人をはじめ5反以上1町未満層が33人がいてかなりの規模の小作人が存在するとともに, 他方には5畝未満層が50人, 9.7%で, 最零細な小作人も少なか

第4表 西服部家小作人の小作料階層別状況

(明治35年)

郡 小作村 地	久 郡										赤 磐 郡				和気郡	御津郡	合 計	再 掲				
	国府	行幸	邑久	本庄	幸島	福田	今城	豊原	計	豊田	石生	可哀	佐伯及	上分共	計	鶴島		尾張	(邑久)山田庄	(邑久)豊安	(邑久)田原庄	
1畝以上	人3	人8	人10	人2	人8	人8	人1	人4	人20	人1	人23	人	人1	人25	人4	人1	人50	人5	人3	人2	人22	
5 〃	7	4	3	8			2	3	10	37	2	36	3	1	42	9	5	93	1	1	1	32
10 〃	11	9	33	7		3	1	9	23	96	1	31	3	7	42	10	16	164	15	8	9	24
20 〃	6	2	19	2	2	5	2	6	7	51	2	9	3	2	16	12	3	82	10	3	5	7
30 〃	5	5	17		3		3	1	8	42		7	2	3	13	2	1	57	11	1	4	4
40 〃			7	4	3	1			5	20		3	1	1	5	2	5	32	5		2	3
50 〃			6	2	1		1		3	13		1		1	2	1	1	17	3	1	1	1
60 〃		1	7						8					1	1	1		10	2	3	2	
70 〃			1						1							1		2	1			
80 〃	1		1						2									2			1	
90 〃			1						1			1		1				2	1			
100 〃			2						2									2		1	1	
180 〃			1						1									1			1	
合 計	33	21	108	25	9	9	9	20	60	294	6	110	13	17	146	42	32	514	54	21	29	93

註 1) 第2表と同一史料より作成。

らず存在している。このような階層別状況を地域別にみると、邑久郡が相対的に上層にあつく、赤磐郡がいっそう下層にあつくなっているといえる。すなわち、邑久郡も最多層が1反以上層であることにかわりはなく、96人でその比率32.7%は全地域のそれよりもわずかではあるがたかくさえある。しかし、この邑久郡には1町以上層のすべてがおり、また5反以上層もその多くがここにおいて、以上の合計は全体の9.5%に達し、全地域の7.0%より大きく、他方5畝未満層は6.8%にとどまり、全地域の9.7%より小さい。そしてこの邑久郡のこのような傾向はほかならず邑久村のそれによってもたらされているのである。赤磐郡は最多層が1反以上層とともに5畝以上層で、この二つで57.5%に達する。さらに5畝未満層が25人で17.1%にもなっている。最大は9反以上層でこれをふくめて5反以上は4人、2.7%にすぎない。この赤磐郡のこのような傾向はほかならず石生村のそれによってもたらされているの

である。先の小作人の町村別規模状況において邑久村と石生村とが対照的であったが、ここでも同様である。こころみにこの両村のそれぞれの傾向を最もよく示す尾張、豊安、山田荘（以上邑久村）と田原上・下（石生村）とを比較してみると、5反以上は22.2, 20.7%, 33.3%と1.1%, 5畝未満は9.3%, 14.3%, 6.9%と23.7%, であって、両者の差異はあきらかである。なお田原は5畝以上1反未満が34.4%で、合計58.1%が1反未満である。

第5表は大正元年の小作料別階層構成を示すものである。この表では地

第5表 西服部家小作人の町村別小作人数・小作料状況 (大正元年)

	久 郡																赤		
	牛窓	国府	行幸	太伯	幸島	福田	今城	豊	豊原	本庄	邑久	山手	山田	尾張	豊安	計	豊田	西山	矢田
1俵未満	2	1	5						3	1	5		1	2	2	17	1	2	2
1～4俵	20	17	16	3	1	1	3	5	18	12	36	2	9	18	7	132	14	27	2
5～9俵	11	10	16	2	6	7	4	10	15	7	29	3	5	10	11	117	8	5	
10～14俵	2	2	7	1	2			3	7	4	19	1	2	13	3	47		3	
15～19俵		3	4			1	1		7		12		1	6	5	28			
20～24俵									1		1		1			2		1	
25～29俵		1	2		1					1	1			1		6			
30～39俵										1	4		2	2		5			
140～149俵																			
計	35	34	50	6	10	9	8	18	51	26	107	6	21	52	28	354	23	38	4

	磐 郡						和 気 郡			岡山市・御津郡					服部合資	赤 穂	合 計
	佐伯	可 真	石 生	田 原	周 匝	計	鶴 山	伊 部	計	岡 山	鹿 田 福 浜	大 野	芳 田	計			
1俵未満	2	1	9	8	7	24										5	46
1～4俵	9	4	68	25	48	172	8	7	15	1	7	1	8	17	25	60	421
5～9俵	6	5	21	9	28	73	6	2	8		2	1	7	10	17	33	258
10～14俵	2	1	7	1	6	19	1		1	3		4	1	8	3	4	82
15～19俵	1		4		8	13						3	3	6	2	1	50
20～24俵			1			2											4
25～29俵																	6
30～39俵		1			1	2										1	8
140～149俵																1	1
計	20	12	110	43	98	305	15	9	24	4	9	9	19	41	47	105	876

註 1) 第3表と同一史料より作成。

第 6 表 西服部家小作人の人作人としての状況—邑久郡尾張—

	服 部 家 小 作 人									同	
	小人 作人 数	服部小作料		全地主小作米			服 部 以 外		最大地主	服部小作米	
		筆数	小 作 米	地主数	筆数	小 作 米	筆数	地主小作米	小 作 米	筆数	小 作 米
30俵以上	入 2	11	俵斗升合 66.3.2.9	5	15	俵斗升合 82.0.4.9	4	俵斗升合 15.1.2.0	俵斗升合 66.3.2.9	5.5	俵斗升合 33.1.6.5
20俵 〃	1	5	28.3.8.3	3	8	48.1.5.3	3	19.1.7.0	28.3.8.3	5.0	28.3.8.3
15俵以上	6	21	93.2.9.5	17	35	164.1.1.3	14	70.2.1.8	93.2.9.5	3.5	15.2.4.9
10 〃	13	31	155.2.7.7	35	60	263.0.0.9	29	107.1.3.2	160.2.7.8	2.4	11.3.9.0
10俵以上	19	52	249.1.7.2	52	95	427.1.2.2	43	177.3.5.0	254.1.7.3	2.7	13.0.5.1
5俵 〃	10	17	73.1.7.5	27	50	170.1.8.5	33	97.0.1.0	94.0.2.5	1.7	7.3.1.8
4俵以上	4	6	19.0.6.5	7	10	33.2.4.0	4	13.1.7.5	19.0.6.5	1.5	4.3.1.6
3 〃	8	9	27.0.1.0	17	25	67.3.0.4	16	39.2.9.4	34.1.6.4	1.1	3.0.0.1
2 〃	3	3	7.1.0.0	5	7	12.2.0.0	4	5.1.0.0	8.3.0.0	1.0	2.1.6.7
1 〃	3	4	3.3.5.0	6	18	42.3.8.2	14	39.0.3.5	23.2.8.0	1.3	1.1.0.2
1俵以上	18	22	57.1.2.5	35	60	156.3.2.6	38	97.2.0.4	86.0.0.9	1.2	3.0.7.4
1俵未満	2	2	1.0.9.0	5	14	19.0.9.4	12	18.0.0.4	9.3.5.5	1.0	0.5.4.5
合 計	52	109	477.0.7.4	127	242	904.1.2.9	133	427.0.5.5	540.0.7.4	2.1	9.0.7.1

註 1) 第 3 表と同一史料より作成。

域がひろがっているが、階層別構成にみられた地域の特徴はおおよそ以上と同一といえる。この表で加わったもののなかで大きいところの一つである周匠村はほぼ平均的であるが、もう一つの赤穂には140俵という大量の小作料納入者があり、注意をひくであろう。

以上の小作人の状況は西服部家とのあいだにおいてのみの小作人の状況なのであって小作農民としての実態とはほどとおいものである。平均2反1畝ばかりの服部家からの小作地のみでは農家としては存立しがたいことはいうまでもない。多かれ少なかれ耕地を所有し、また他の地主からの小作地があることが予想されえよう。これらとさらには農外就業等をも検討することによってその実態がはっきりになるのであろう。このことのためには少なくとも町村役場文書類による検討が不可欠であるが、残念ながら残存状況はきわめてわるくそれによる検討はすることはできない。このような状況のなかでかぎられた地域についてであるが、西服部家小作人の小作農民総体としての把

(大正元年)

1 人 あ た り						1 筆あたり小作米		服部小作米 に対する地 主小作米の 比率
全地主小作米			服部以外地主		最大地主	服部小作米 のみ	その他とも全 地主小作米	
地主数	筆数	小 作 米	筆数	小 作 米	小 作 米			%
2.5	2.5	俵斗升合 41.0.2.5	2	俵斗升合 7.2.6.0	俵斗升合 33.1.6.5	俵斗升合 6.0.3.0	俵斗升合 5.1.9.0	22.9
3.0	8.0	48.1.5.3	3	19.1.7.0	28.3.8.3	5.5.5.7	6.0.1.9	67.1
2.8	5.8	27.1.5.2	2.3	11.3.0.3	15.2.4.9	4.1.8.5	4.2.7.8	131.2
2.7	4.6	20.0.9.3	2.2	8.1.0.2	12.1.4.4	5.0.0.9	4.1.5.3	68.9
2.7	5.0	22.0.2.8	2.3	9.0.6.4	13.1.5.6	4.3.1.9	4.1.9.9	71.3
2.7	2.7	17.0.1.9	3.3	9.2.8.1	9.4.0.3	4.4.1.0	3.1.6.4	132.1
1.8	2.5	8.1.6.0	1.0	3.1.4.4	4.3.1.6	3.0.7.8	3.1.4.4	70.1
2.1	1.1	8.1.8.8	2.0	4.3.8.7	4.1.2.1	3.0.0.1	2.2.8.4	147.0
1.7	2.3	4.0.6.7	1.3	1.3.0.0	2.3.6.7	2.1.6.7	1.3.1.4	72.4
2.0	6.0	14.1.2.7	4.7	13.0.1.2	7.3.6.0	0.3.8.8	2.1.5.5	1,008.7
1.9	3.3	8.2.8.5	2.1	5.1.6.7	4.3.1.2	2.2.4.2	2.2.4.5	170.1
2.5	7.0	9.2.9.7	6.0	9.0.0.2	9.2.4.7	0.2.4.5	1.1.5.0	1,470.2
2.4	4.7	17.1.5.6	2.6	8.0.6.3	10.1.5.5	4.1.5.1	3.2.9.5	47.2

握を試みたい。邑久郡邑久村には小作人との間の紛議への対処として地主達
が同盟をとりむすび(邑久同盟)、共同で小作人に対応したが、同盟事務所の
あった西服部家にはこの邑久同盟関係文書類が多く残されている。この邑久
同盟についての検討は本共同研究の他の担当者によって詳細になされるが、
ここではこの邑久同盟地域について小作人の小作農民としての状況を検討し
ていきたい。

第6表から第8表までは第3表、第5表と同一史料によっているが、そこ
に記載されている邑久同盟分に関する資料から作成したものである。この年
の邑久村尾張の西服部家の小作人は52人であるが、それらの西服部家小作人
としての小作料階層別把握が第5表である。この52人の小作人は、30俵台2人、
20俵台1人、10俵台19人、1俵以上5俵未満18人、1俵未満2人となっていて、
階層差は大きい。小作料の合計は477俵7升余で、1人あたり平均は9俵7
升余である。ところでこれら西服部家小作人以外の地主からも耕地を小作し

ており、その小作米は427俵5升余で、1人あたり8俵6升余となる。すなわちこの尾張の西服部家小作人は西服部家からの小作地の約9割の大きさの小作地を他の地主から借入しているのであって、きわめておおまかにいえばおよそ2倍の規模と考えてよい。この西服部家をふくめて2.4人の地主から4.7筆の耕地を借入れ、小作料17俵1斗6升程というのが服部家小作人の状態である。この他地主からの借入はすべての階層にみられるが、服部家からの借入がもともときわめて小かいがために他地主からのものの服部家からのものに対する比率が1470.2%ときわめて大となっている1俵未満層はいわずとしても、最上層から順次、22.9%、67.1%、71.3%、132.1%、170.1%となっていて、上層ほどそのウェイトは小さく、下層ほどそれは大きい。そのことによって服部家小作人にみられた階層差はややちじまっている。

第7俵はここ尾張の全小作人について小作状況を示すものである。84人の小作米1,219俵2斗7升程で、1人あたり14俵2斗余となる。2.1人の地主から3.6筆の耕地を小作しているのである。小作料のうち最も大きく借りている地主の分は9俵1斗6升余で64.8%となる。こころみにこの西服部家の分は5俵2斗9升余で42.9%を占める。最大の49俵1斗1升から最小の2斗までと規模差の大きいこれら小作人を階層別にみると、40俵台4人、30俵台6人、20俵台10人、10俵台29人、5俵台17人、1俵台17人、1俵未満1人となる。上層ほど関係地主数が多く、筆数も多く、下層ほどそれらは少ないが、それは小作人の規模に比例的ではない。単位小作料あたりのそれらの数が示すように、上層ほど相対的に小さく、下層ほど相対的に大きい。また小作料のうちの最大地主の分が占める割合も上層ほど小さく、下層ほど大きい。以上のことから、小作人は幾人かの地主から「散がかり」的に耕地を小作していること、上層の小作人ほど1地主からの小作地が大きいこと、それにもかかわらず特定の地主からのもののウェイトはむしろ小さいこと、そして1筆の面積の大きい耕地を耕作していること、これらのことがあきらかとなった。なお第8表はこの尾張の小作農民上位10人である。

第7表 邑久郡尾張の小作人の存在状況

(大正元年)

	小 作 人 の 存 在 状 況								同 1 人 あ た り							
	小作人数				最大地主		西 服 部					最大地主		西 服 部		
		筆数	小 作 米	関地主係数	筆数	小作米	筆数	小作米	筆数	小作米	関地主係数	筆数	小作米	筆数	小作米	
45俵以上	人3	35	俵斗升合 145.0.3.1	人11	22	俵斗升合 72.3.6.8	13	俵斗升合 52.0.3.3	11.7	俵斗升合 48.0.1.0	人3.7	7.3	俵斗升合 24.1.2.3	4.3	俵斗升合 17.1.4.4	
40 〃	1	7	44.1.5.3	3	5	36.1.2.0	2	36.1.2.0	7.0	44.1.5.3	3.0	5.0	36.1.2.0	2.0	36.1.2.0	
40俵以上	4	42	189.1.8.4	14	27	109.0.8.8	15	88.1.5.3	10.5	47.1.4.6	3.5	6.8	27.1.2.2	3.8	22.0.3.8	
35俵以上	2	15	73.3.1.5	5	9	48.0.1.0	6	43.0.0.9	7.5	36.3.5.8	2.5	4.5	24.0.0.5	3.0	21.2.0.5	
30 〃	4	30	133.2.6.0	16	11	57.1.4.0	19	27.1.5.0	7.5	33.1.6.5	4.0	2.8	14.1.3.5	4.8	6.3.3.8	
30俵以上	6	45	197.1.7.5	21	20	105.1.5.0	25	70.1.5.9	7.5	32.0.2.9	3.5	3.3	17.2.2.5	4.2	11.2.9.3	
25俵以上	5	10	131.0.0.0	16	16	77.2.1.5	14	50.2.9.5	2.0	26.0.8.0	3.2	3.2	15.2.0.3	2.8	10.0.5.9	
20 〃	5	26	107.2.3.7	12	18	71.0.2.7	8	39.0.8.7	5.2	21.2.0.7	2.4	3.6	14.0.8.5	1.6	7.3.3.7	
20俵以上	10	36	238.2.3.7	28	34	148.2.4.2	22	89.3.8.2	3.6	23.2.4.4	2.8	3.4	14.3.4.4	2.2	8.3.9.8	
15俵以上	11	50	189.0.0.2	27	28	127.0.3.6	21	100.1.2.5	4.5	17.0.7.3	2.5	2.5	11.2.2.1	1.9	9.0.4.8	
10 〃	18	65	217.2.1.7	39	40	153.3.6.3	16	72.0.3.0	3.6	12.0.3.4	2.2	2.2	8.2.2.0	0.9	4.0.0.2	
10俵以上	29	115	406.2.1.9	66	68	280.3.9.9	37	172.1.5.5	4.0	14.0.0.8	2.3	2.3	9.2.7.6	1.3	5.3.7.8	
9俵以上	5	14	47.0.2.0	11	8	32.1.6.0	6	23.1.3.5	2.8	9.1.6.4	2.2	1.6	6.1.9.2	1.2	4.2.6.7	
8 〃	3	7	24.3.7.4	5	5	21.1.0.2	2	3.3.7.0	2.3	8.1.2.5	1.7	1.7	7.0.3.4	0.7	1.1.2.3	
7 〃	5	12	35.3.4.2	8	7	30.2.8.4	2	3.1.6.0	2.4	7.0.6.8	1.6	1.4	6.0.5.7	0.4	2.7.2	
6 〃	1	2	6.1.9.0	1	2	6.1.9.0	—	—	2.0	6.1.9.0	1.0	2.0	6.1.9.0	—	—	
5 〃	3	6	16.1.1.5	4	6	13.2.2.5	4	8.1.2.5	2.0	5.1.7.2	1.3	2.0	4.2.0.8	1.3	2.3.0.8	
5俵以上	17	41	130.2.4.1	29	28	104.1.6.1	14	38.3.9.0	2.4	7.2.7.3	1.7	1.6	6.0.5.7	0.8	2.1.1.7	
4俵以上	5	8	23.0.6.7	6	4	8.1.8.0	4	8.1.8.0	1.6	4.2.5.3	1.2	0.8	1.2.7.6	0.8	1.2.7.6	
3 〃	5	6	17.3.3.5	5	6	17.3.3.5	3	6.3.6.0	1.2	3.2.2.7	1.0	1.2	3.2.2.7	0.6	1.8.7.2	
2 〃	5	6	13.1.5.5	6	6	12.2.0.5	2	5.1.0.0	1.2	2.2.7.1	1.2	1.2	2.2.0.1	0.4	1.0.2.0	
1 〃	2	2	2.0.5.5	2	2	2.0.5.5	1	1.0.0.0	1.0	1.0.2.8	1.0	1.0	1.0.2.8	0.5	2.0.0	
1俵以上	17	22	56.2.1.2	19	18	40.3.7.5	10	21.2.4.0	1.3	3.1.3.0	1.1	1.1	2.1.6.3	0.6	1.1.0.8	
1俵未満	1	1	0.2.0.0	1	1	0.2.0.0	—	—	1.0	0.2.0.0	1.0	1.0	0.2.0.0	—	—	
合 計	84	302	1,219.2.6.8	178	196	790.0.1.5	123	481.2.7.9	3.6	14.2.0.8	2.1	2.3	9.1.6.2	1.5	5.2.9.4	

註 1) 第3表と同一史料より作成。

第8表 尾張小作人上層者

(大正元年)

小 作 人 名	筆数	小 作 料	関係 地主	服部小作	最大地主(同氏名)	
川 崎 友太郎	筆 15	俵斗升合 49.1.1.0	人 4	俵斗升合 7.3.5.0	俵斗升合 28.2.8.5	長 田
服 部 敬 吉	8	48.1.5.3	2	28.3.8.3	28.3.8.3	服 部
岡 本 与三吉	12	47.1.6.8	4	15.1.0.0	15.1.0.0	〃
古 武 竹次郎	7	44.3.5.0	3	36.1.2.0	36.1.2.0	〃
草 下 米 藏	8	37.0.9.9	2	30.2.0.9	30.2.0.9	〃
岡 本 芳 藏	7	36.2.1.6	7	12.2.0.0	17.2.0.1	高 金
川 崎 伊之吉	13	34.3.1.5	3	1.1.9.0	21.1.2.0	長 田
藤 本 虎 藏	5	33.2.7.5	4	15.1.2.5	15.1.2.5	服 部
入 江 八次郎	6	32.2.8.5	4	10.2.3.5	10.2.3.5	〃
那 須 辰三郎	6	32.1.8.5	4	—	10.0.6.0	高 金

註 1) 第3表と同一史料より作成.

以上において小作人の存在状況を検討してきたが、邑久村尾張にみられた小作人の実態はこの西服部家地主経営の成立の基盤としても、それをゆるがせるものとしてもきわめて示唆的であろう。そもそも「散がかり」的であることが特定の地主への従属を相対的によわめるものとなろうが、上層の小作人ほど特定の地主からのウェイトがむしろ小さいことがこれら上層小作人の特定の地主への従属をよりゆるやかにせしめるものとなるであろう。そして耕地の1筆の大きいことは、これまた生産力発展の一条件となりうるものであろう。

ところで、これまでに検討の対象としてきた邑久村はこの西服部家の小作地所在地のなかで小作地が最も大きいところという点においてのみではなく、小作人の規模が最も大きいということにおいても特徴的な地域なのであったが、この邑久村と対照的ともいえるものに石生村があった。この規模が総じて零細であったここ石生村の西服部家小作人の小作農民としての実態を検討する手がかりは邑久村尾張のごとくにはない。石生村は昭和4（1929）年の

耕地小作地率は60.7%できわめてたかいが⁽¹⁸⁾(邑久村50.1%, 全県43.8%), この小作地率のたかさは先にみたとき零細規模の小作人は自作地はいつそうなく、他の地主からの小作も行なっていたであろうことを推測せしめる。その場合、なかには大きな小作地を借入れているものもあったであろうが、それはむしろ数少ないと考える方が妥当であろう。零細農民の広汎な存在がみられたところであろう。なお、ここ石生村は地主達が地主同盟を結成して共同して小作人に対応したところであって、この点においては邑久村と同様である。しかし以上のようなこの両村の小作農民の存在形態の相違は、この両村における小作人の動向とそれへの地主の対応の差違をもたらすであろう。この点については第4節において論及したい。

(2) 小作地の管理方式

つぎに大正元(1912)年に所有耕地180町歩余、小作人887人という大地主西服部家の小作地の管理、小作人の支配方式を検討しよう。

西服部家の所有耕地は岡山県下1市3郡、25市町村と兵庫県赤穂というように広範囲にひろがっていた。このような大地主がその小作地、小作人を管理、支配していくことは容易なことではなかろう。これまでの研究によって、多くの場合、大地主は差配人、名代人、あるいは世話人制度と名称される中間的な管理・支配機構によって管理、支配していたことがあきらかとなっていて、岡山県南の巨大地主野崎家の場合はこの「世話人」制度は明治24(1891)～明治27年頃に整備されたとされている⁽¹⁹⁾。さて、この西服部家であるが、ここでも名代人、あるいは世話人と名称される管理機構によっていた。この名代人については明治30(1897)年前後からの文書類にみられるが、その内容を規定したものは容易にみることができない。明治43年の「取締役会相談会ニ関スル書類」(No.1-b-76)の明治43年12月22日に「一、名代人職務権限及定

(18) 『農業調査結果』1929年 岡山県臨時農業調査部 による。

(19) 前掲(2)―③と同一書 446～458ページ。

約書ヲ差入レシムル事」という記録があり、ここにつぎのごとき誓約書の雛形が記されている。

〔文書 1〕

誓 約 書

私儀今回貴殿御所有地所世話係囑托相成候ニ付テハ左記ノ條項固ク相守リ可申候依而誓約書差入候也

住 所 氏 名 印

月 日

服部和一郎殿

條 項

- 一 私ニ御囑托相成地所ニ付テハ常ニ耕作ノ模様ニ注意シ小作人ノ勤怠ヲ時々御報告申上ル事
- 一 私ニ囑托セラル、地所ノ小作人ニシテ其小作相止メ候場合ハ田畑ニカ、ハラズ十二月限り地所ヲ引上ケ直ニソノ旨申上ケ次ノ小作人ヲ推薦可致事
- 一 小作人ノ推薦ニ付テハ責任ヲ負ヒ十分其人物ヲ詮議可致事
- 一 小作人ニ如何ナル不都合ノ行為アルモ勝手ニ地所引上及当換等致間敷事
- 一 小作人ニシテ不適当ト認ムル事情ヲ委敷申出テ小作地ノ引上ケヲナス必要アル場合ハ貴家地所係ノ人ト合議ノ上決行可致事
但シ非常ノ場合ハ臨機ノ処置ヲトリ貴家ノ損失ヲ招カザル様十分注意可致事
- 一 小作人ニシテ勝手ニ地所ノ当換更換作ナトスルトキハ十分之ヲ取締ルベキ事

ここに名代人の権限として規定されているのは、小作とりやめ耕地の引きあげと小作人の推薦、耕作勤怠状況の報告、小作人による当換などの取締、である。現当主和一郎氏によれば、名代人は作り手の斡旋、検見の立会いを行ない、小作料について意見をのべるが、小作料の決定、その徴収にはかわらなかつた、とのことである。そして、この定約書の 3 項、4 項では小作地引上制限（禁止）がうたわれているのである。名代人の権限はこのようにきわめて限定的であつたといえよう。以下、名代人にかかわる記述によってこの名代人の機能、性格をみていこう。

〔文書 2〕

明治三十二年四月九日 服部節二、木村恵三郎、浦上繁太郎三名同行ニテ幸島村名代人延原米蔵宅へ行 同氏ノ案内ニテ見分ス

- 一 幸島村大字西幸島百五十二番地畦畔破損凡二十間六尺杭五十本与フル約

- 一 同村大字同所三百五十二番瘦地ナルヲ以テ小作相止地所返戻請小作人無之ニツキ重松万吉ナル物へ掃溜耆艘ヲ与へ小作可為致約 尤本年限りニテ代金ハ壹艘五円ノ由
- 一 西幸西窪田浅吉所有地売買ニ付請地見分何レモ中等以上ノ地所ナリ
(「地所巡撫記録」No.1-c-50)

ここでは名代人は地主の小作地巡見の案内を行なっている。地主はこの名代人の案内で巡見して必要な用排水施設の修理、肥料供与を決定し、また売出地を見分している。この地所の売買に際しての名代人についていえば、明治40年6月10日取締役決議中の「西山村赤松常次郎ヨリ地所譲受度旨申出ニ対スル件 花房称太(名代人…引用者)へ標準価格ヲ問合シテ次回ニ於テ決定スルコト」(「明治三十七年取締役決議録」No.1-b-51)にみられるように、名代人は一定の役割を果たした。

ところで、明治39年2月10日取締役会議中につきのごとき記述がある。

〔文書3〕

- 一 下山田今田熊三郎地所世話掛リ手数云々ノ件
従来赤枝嘉吉手数ヲ取ル居ルモ同人ハ取立ノ際立会ハズ多ク今田熊三郎ヨリ受取リ居ルヲ以テ以後ハ世話掛リヲ今田へ譲ラシムル事ヲ赤枝ヘ示談スル事
(「取締役決議録」No.1-b-51)

小作料の取立は、後にみるように西服部家事務所から取立員が出張して徴収するという方法によって行なわれたが、この記述によれば、名代人は小作米の徴収に立会うことになっていた。さらに、たとえば明治40年4月9日取締役決議に「八、本年ハ直取立トシ今田熊次郎ノ相続人帰村ノ上ハ前記ノ例ニヨリ委嘱スルコト 十一、本年ハ直取立トシ当分名代人ヲ置カズ 諸税ハ其都度出張シテ納付スルコト」(同前史料)という記述があつて、名代人が小作料の徴収を行なっているがごとくである。このような記述は、明治39年1月10日「小山専次ヨリ買入ノ地所小作取立方并ニ手数料ノ件ハ直取立トシ室田ヘノ手数料ハ木村ヲ経テ二十円交付スルコト」(同前史料)にもみられる。ここにみられる直取立とするというその前の小作料の徴収であるが、以

上の記述からは名代人がそれを請負っていたとただちにはいいがたい。直取立が名代人をおくこととの関連で述べられてはいるが、ここでの直取立とは名代人による請負かどうかということではなくて、名代人の立会の有無を指すものと思われる。しかし、明治41年10月8日の「野上千代松取扱上ノ小作米受取方法ノ件」として、「本年度ヨリハ小作人ヨリ直接取立ツルコトニシテ予メ野上へ通知シ且出張ノ際説明スルコト」という記述がある。ここではこれ以前は小作人からの直接取立ではなかったが、野上「取扱」をやめて直接取立とするというのである。この点についてであるが、後に引用する小作証書に「小作米ハ毎年拾壹月拾五日限り野上千代松宅へ持参シ無滞納附可致候」とあって、野上宅への搬出が野上「取扱」の内容で中間請負的なものではないと思われる。

〔文書4〕

二十九年十一月四日 尾張名代人岡本千代松稲毛見分申出 山田庄小作惣代（立岡熊吉 柿本口吉）用捨嘆願ニ来ル

.....

十一月十二日 浦上繁太郎 小林又吉 藤原馬次郎 藤原登三郎 水村恵三郎 共本郡稲毛見分ニ行

.....

十二月二十五日 尾張惣代人ヨリ五歩払ヲ申出タリ 牛窓地主ハ会議ヲ開ク 但決議ハ名代人ヲ以テ前処分通りニテ出来スルヤセザルヤ尋問スル事ニ決ス

十二月二十六日 名代人岡本千代松ヲ招キ尋問ニ及ハセタルニ地主採用ナキニ於テハ壹升モ出来不致由申来ル

（「二十九年度不熟略誌」No.1-c-325）

ここでは名代人は検見の要請、地主・小作人間の意見、要求の取次ぎを行なっている。しかし、そのまえに小作人の要求は直接になされているのであって、むしろ例外的であろう。

以上のごとくにこの西服部家の名代人の業務は、小作人の推薦、小作地の状況・小作人の勤怠動静の報告、西服部家からの出張者の案内、検見の立会と小作料についての意見具申、小作米取立の立会、そして小作米の集荷場所、

土地売買についての情報提供、などである。そして、小作地の管理、小作人支配にかかわる重要事項は多く西服部家によって直接におこなわれていた。重要事項とは、小作人の選定と改更、検見の実施、小作米の取立、小作人の諸要求への対応、土地改良・用排水施設の改修、などである。名代人の業務内容は小さく、権限は弱い。服部家による直接的管理・支配が行なわれている。この点、野崎家が強力な世話人制度によっていたのとは、まさしく対照的である。⁽²⁰⁾

名代人に対する手数料であるが、これについては「新買入地各名代人手数料及期間ノ件 今後買入ノ地所ニ名代人ヲ置クトキ又ハ名代人ノ変更ヲ要スル場合ニハ総テ五ヶ年以内ニテ年期ヲ定メ手数料ハ四斗俵一俵ニ付一升以内トシ嘱託書ニ名代人ノ遵守スヘキ事項ヲ記載シ受書ヲ呈スルコト」にみられる、4斗俵に1升であった。このほかに、たとえば明治40年4月9日取締役会議「六、行幸村石原、岡竹、徳田ヨリ買入ノ地所名代人及口銭ノ件 五ヶ年間室田へ委任シ従来ノ分ト合シテ四斗俵老俵ニ付一升ノ手数料ヲ与ヘ別ニ口銭八円ヲ室田ニ交付スルコト」にみられるように、土地購入の斡旋、仲介にたいしては別途に口銭が与えられている。

この名代人には、その村の有力者で、押しのきく人物をえらび委嘱したという。しかし赤枝嘉吉にかわって下山田の世話掛となった今田熊三郎は服部家の小作人であり、このような階層の者も名代人になっているのである。また先に引用した文章のなかに、相続人が帰村したら委嘱云々ということはあったが、そうであるからといって世襲であったということではない。これらの点もまた野崎家とは大きく異なる。⁽²¹⁾

以上のごとくに、名代人制度がそれなりに整備され、それなしには完結しないとはいえ、服部家における小作地の管理、小作人の支配はその重要事項

(20) 同前。

(21) 同前。

は西服部家によって直接的に行なわれていた。ここには「事務部」があり、これによって管理、支配が行なわれていた。これについての規程としては大正2年7月25日相談会の下記の記事が唯一のものである。

〔文書5〕

- 事務ノ分担及ヒ書類帳簿整理ノ方法ニ関スル件
- 一 石井卯次郎 貸金、塩田、貸家、諸帳簿検査
 - 一 上森辰太郎 地所、山林地 他
 - 一 正富米三 諸会社帳簿及諸記録
 - 一 服部節二 理事長
 - 一 服部鹿太 大本家諸係
 - 一 竹内虎太郎 大本家諸帳簿及諸係
 - 一 久山衡平 年度勘定係

(「相談会決議録」No.1-b-75)

服部節二は酒造を担当する本家の主であり、服部鹿太は醬油醸造を担当する分家の主であって、大本家の者である。石井卯次郎は、¹⁾今津屋という乾物相物諸紙商として前引用の明治31年の「商工人名録」にある牛窓の人で、衆議院議員選挙人を内容とする「地主録」に名をつらねる土地持層で、牛窓町の町会議員をつとめている。西服部家の非常勤ではあるが番頭で西服部家帳簿に貸借対照表をとりいれた人といわれるが、「総勘定元帳」は明治25年が最初であるのでこの頃にはすでに参画していた。また、明治27年の「石井卯次郎謹白」ともいうべき文書によれば、家憲の創定に加わったことが記されている。昭和4年11月9日に死去した。上森辰太郎は小学校の教員をしていた人で、浦上繁太郎のあとに地所係となったという。浦上が帰郷するのは明治41年5月10日であるが(「大本家年表 昭和五年改」No.1-a-98)、それ以前の明治39年11月4日から取締会に加わっており(「相談会決議録」)、この頃から地所係を担当することとなったと思われる。昭和6年1月29日死去という。正富米三は「長ク官途ノ末班ニ居タ。……俣野ト云フ郡長ニ見出サレテ郡役所へ奉職、有田ト云フ土木係長ニヨリテ府庁へ奉職シ、足助ト云フ課長ニ厚キ信任ヲ受ケ……」(「謝辞 明治四十二年」No.1-a-46)とあるが、

邑久郡本庄村で小学校をおえた人で、後に50歳ぐらいになって、石井卯次郎の紹介によって西服部家に雇われた、その妻は卯次郎の妹である、とのことである。竹内虎次郎は牛窓の者で、西服部家の遠い縁続で、奉公人的な面があったという。久山衡平は土師の商売人の家の息子で、ソロバン、計算が得意であったという。「勤務表 明治三十七年」(No.1-b-65)によれば、明治37年4月から翌年3月までの1ヵ年間の出勤は、久山は229.5日、竹内は289日であって、常勤である。石井卯次郎は「取締役会出席、東京行き、貸金赤穂行き」などであって常勤ではないことを示している。

以上は大正2年段階であるが、その前後にかかわっている人物についてみよう。上森辰太郎がそのあとをついだ地所係を、それ以前に長く担当していたのは浦上繁太郎であった。浦上は明治44年1月16日に死去するが、その3年前に帰郷するまでの間、地所係として、あるいは上森が地所係になった後も、後にみるように小作米取立の際の出張員として勤務していた。明治14年から西服部家に雇われ、大本家制度創設以来の事務員で、住込みであったという。前引用の「勤務表」によれば、浦上は同上期間の勤務日数は378日であって、抜群の大きさである。上記「勤務表」には、浦上、久山、竹内と石井卯次郎のほかに、小林又吉、木村恵三郎が記されている。この2人の氏名はこれまでに引用した文書類に出てきているが、この「勤務表」には、小林又吉は「小作証入改奥へ出、赤穂行き、県税上納佐伯行き、土地巡見、赤穂土地買入」、木村は「浦上同行」とある。小林は西町の商家(材木屋)で商才があったというが、前引用の明治31年の商工人名録には、薪炭木皮苦販売△豆田屋小林又吉とある。木村恵三郎は石井卯次郎の「先生格」であったとこのことで、豊原村に居住していた。このほかの1人に石井柳三郎がいるが、柳三郎は卯次郎の弟である。西服部家の直接的ともえる小作地管理、小作人支配は以上のごとき「事務部」、以上のごとき人材によって行なわれたのである。

ところで、以上のごとき事務部組織とそれに相応する名代人制度とはいづかたちづくられたのであろうか。小作地の管理、小作人の支配がなんらかの

世話人制度によらなければならないのは、所有耕地が居所をこえて、しかもその範囲が拡大したという状況になったときであろう。西服部家の土地集積の過程については前節において検討したが、土地集積が急速化するのには、明治10年代末、20年代初であった。石井卯次郎の明治27年執筆の前引用「謹白」には、「明治八年始メテ地所抵当貸金収利ノ業ヲ開キ時機宜シキヲ得テ本業大ニ振起シ加フルニ地所買収ニ注目シ明治九年始メテ和気郡新庄村ニ田地若干歩ヲ買得シ爾来貸金ト共ニ歩ヲ進」み、15年には貸付業はいっそうひろがるが、折からの不況をも苦難にたえてきりぬけ、「明治二十年ニ至リテ大約難件ノ局ヲ結ヒ是時ニ於テ地所ノ買収大ニ進ム爾来貸金地所及酒業ノ業益々進ミ以テ今日ノ盛大ニ至ル……」と、その頃の急速な拡大が記されていたが、名代人制度と事務部がこの過程でかたちづくられつつあったものとおもわれる。おそらくは明治20年代のなかばには、以上にみた事務部が組織され、名代人制度ができているものと思われるのである。

ここで以上のごとき事務部、名代人制度をとる西服部家の小作地管理、小作人支配における重要事項を概観したい。

「取締役会議録」によって明治40年についてみる。1月は39年度の小作取立決算報告の整理がすすめられ、2月5日に報告会をひらき、日程繰り上げの取締役会が開催される。2月5日に地所修繕の件について検討され、実地調査が行なわれる。4月9日に地所巡検及随行員選定の件が議せられ、巡検出発は4月16日、服部主人に随行するのは、木村、石井、浦上、小林の4名である。5月7日に「出張員ヨリ小作人又ハ其ノ他ヘ契約書ヲ渡ス際ノ手順ノ件……」が議せられている。小作人との間には契約書が取り交されるが、地主はそれを名代人を通じてではなく直接に交付する。この小作契約書はつぎのごときものである。

〔文書6〕

小作証書

邑久郡行幸村大字服部千拾五番

字溝畑

一 田壹反七畝貳拾六歩

此小作米貳石三斗四升五合也

右貴殿御所有ノ地所拙者小作致候ニ付左ノ諸件ヲ契約ス

- 一 小作米ハ毎年拾壹月拾五日限り野上千代松宅へ持参シ無滞納附可致候
- 一 小作米ハ総テ明治参拾六年五月岡山県令第四十六号米穀検査規則第五条各項ニ依リ調製シタル合格米四斗入ヲ以テ壹俵トシ端米貳斗以上ナルトキハ空俵壹俵相添可申候
- 一 小作人事故アリテ小作米納附方延滞ノ節ハ保証人引キ受ケ速ニ納附可致候
保証人ハ小作人ノ契約シタル総テノ事項ニ付キ連帯ノ責任ヲ以テ小作人ニ代リテ履スル行ノ義務ヲ負担可致候 若シ小作人保証人トモ義務ノ履行ヲ怠リ御出訴相成等ノ場合ニハ其費用等ハ一切小作人ニ於テ賠償可致候
- 一 小作期限ハ毎年秋作刈リ上ヲ以テ一期トス 尤貴殿ノ御都合ニヨリ期限内ト雖モ何時御引上ゲニ相成候トモ毫モ苦情等申間敷尚又拙者ノ都合ニ依リ小作相止候節ハ秋作刈上ゲ次第速ニ返上可致候 若シ双方異議無之トキハ幾年ニテモ本契約全般ノ事ヲ継続可致候
- 一 小作地ニ於ケル修繕灌水等ノ費用ハ小作人ニ於テ一切支弁可致候
- 一 自然不熟ノトシ柄ニ際シ他ノ小作人ト申合セ徒党ヲ組ミ減額嘆願致間敷候
- 一 小作地ハ地質瘦薄ニ至ラザル様精々注意可致且猥リニ小作人ノ意見ヲ以テ地形変更致間敷候
- 一 小作地ハ如何ナル事故アルト雖モ貴殿ノ認可ヲ得ズシテ他ヘ当付等致間敷候
右契約ノ諸件ハ小作人并ニ保証人トモ確守可致若シ違背ノ廉有之候節ハ貴殿ノ御指図ニ従ヒ損害賠償可致候 依テ為後日小作証書如件

明治四拾年参月八日

邑久郡行幸村大字服部六百拾九番地 小作人 岡竹藤造
同 郡同 村大字服部六百拾四番地 保証人 岡竹長吉

邑久郡牛窓町

地主 服部和一郎殿

(「小作関係旧書類」No.1-c-84)

さて、11月10日に40年度小作米取立の件が議せられ、つぎのごとき決定をみる。まず、取立の方針を「容赦ヲ為サ、ルコト、シ若シ毛見ノ請求ヲ為スモノアルモ成ルヘク実査スルコトヲ遅クレ其刈取りタルモノニ対シテハ堅ク処分ヲ為ササルコト」とした後、出発期日、出張員等をつぎのごとくに決定している。出発期日は12月10日頃、出張員は周匝村、佐伯村、矢田村、稗田村、上市地方、赤穂郡は主任小林又吉、補助石井柳三郎、石生同盟、邑久同盟は主任浦上繁太郎、補助上森辰太郎、前記以外の諸村は主任は同じく浦上

繁太郎，補助久山衡平，上森辰太郎，江本八百蔵となっている。前々年の38年には，「十二月七日浦上，小林赤穂へ出張，八日ヨリ取立ニ着手，濟次第佐伯，稗田，豊田ヲ順次取立，十六日頃小林ハ周匝へ行，浦上ハ邑久郡上分へ着手スル事」（12月4日取締役会決議）というようにやや詳しく日程等を記している。このほか小作米の積取運搬に使う回漕船について，各主任が雇入れること，蔵入は主任服部鹿太，補助正富米三で，その方法は前年の例によることとしている。この後者の蔵入であるが，前年の明治39年には「倉入ノ方法ハ充分研究ヲナスコト」（11月12日取締役会）とあるのみであるが，さらにその前年には「服部鹿太ニ専任シ郡訳ニ積重スル事」となっている。小作米はこのように徴収，運搬され，神崎倉庫，大橋倉庫という二つの倉庫に収納されるのである。

（つづく）